「宗教対話」による価値の創造

（大阪府妙見閣寺住職）　竹内日祥

(1) 二十一世紀の人類的課題「対話文明社会」の創造

ご承知の通り二十一世紀の国際社会が、情報と通信輸送の技術革新により、急激なグローバル化が進み、本格的な多元化社会に突入していくことは既に確実になって来ました。この多元化社会においては、見解を異にする人種や民族、宗教や価値観、文化や文明どうしが、互いに異なる見解を相互で抱き乍ら、ひたすら「対立」を回避し、理解と共感を必死で模索し、共存し共生しあう社会を求めて、あらゆる努力を傾けなくてはなりません。このような二十一世紀の多元化社会が、巧みに運営される上で不可欠な条件が、ここに採りあげる「対話」であります。今や人類全体の歴史的潮流の赴くところ、「対話」は絶対不可欠である事が、着実に多様な分野の知的リーダーにより、着実に確認されつゝあります。

ところでこの「対話」という概念が次第に明確にされ、その意味する内容につき、検討が加えられたのは、二十世紀も半ばを過ぎた頃であり、更に厳密に学術的究明の手が伸びたのは、アメリカを中心とした認知科学及び、カオスの研究が端緒を切り開いた複雑系科学等の貢献による処が多大であったものと推測されます。そもそも一般的には、これまでの近代文明社会では、おおむね「対話」・ダイアローグが採択されることはごく稀であり、ほとんどその例はありませんでした。近代文明社会では、むしろ「対話」のダイアローグではなく、もっぱら討論のディベートが花

盛りだったのです。

そもそも近代文明社会では、近代社会が成熟するに及び、社会のあらゆる領域で「対話」が悉く喪失させられているという宿命的課題が浮上するのは、避け難い必然だったのです。この危険な予告は、二十世紀の初頭に近代社会学が誕生して以来、片時も絶えることなく警告されつづけた非常事態宣言でした。なぜならば、この「対話」がない社会とは、その社会からすべてのコミュニティが崩壊するという意味に他ならなかったからです。

近代文明社会では、多くの家庭が崩壊に向い、学校では教師が信望を失い、企業やその他の多様な分野の組織の多くが、求心力を失う結果となります。宗教の殿堂である寺院・教会のリーダの指導力が失せ、政治も行政も国民の支持をなくし、社会全般のあらゆる規範が効力を喪失し、国家のあらゆる機能は低下しつづけ、民主主義が深刻な絶望的危機にさらされるのです。

それでは、何故、近代文明社会ではこのような悲惨な事態を迎えることになるのでしょうか。それはひとえに近代社会が、「対話」を放棄してしまうからに他なりません。この点では、まさに私達現代日本の社会も例外ではない状態にあります。今や日本の社会から「対話」が完全に姿を消そうとしていることは周知の通りです。既に多くの家庭では夫婦の「対話」はありません。親子の「対話」が危機を迎えています。このような近代文明社会では、「対話」が消失した組織、或いはコミュニティから、確実にその組織、或いはコミュニティの解体が始まるのです。この事は、十九世紀末期から二十世紀初頭に至る多様な発展形態の啓蒙思潮の中で、既に早々とフッサール、オルテガ、ディルケーム等によって、厳しく予見されていたのです。

(2) 「宗教対話」へと向う二十一世紀の宗教界の動向は歴史的必然

次に「宗教対話」につき述べてみたいと思います。本格的な「宗教対話」は、西欧キリスト教社会で生まれました。それは、世界がグローバル化の波に乗り始める一九六〇年代の頃でした。プロテスタントとカトリック教会で、ほぼ同時期に始まったのです。それまでのキリスト教では、この宇宙と世界を創造した唯一絶対の神を奉じるキリスト教の教義を通して、確実・絶対に世界各地のあらゆる諸宗教よりも高度な宗教であるという、宗教一般にも常にあり得る独断的権威を全面に押し出して、世界開教に挑んでいました。

しかし、この態度は決して新しい時代に適さない。むしろ、それどころか、偉大にして高潔なイエス・キリストの精神を根本的に損なう事態を招くことになると、深い確信に至るのです。そして、この伝統的な独善的方針をそのまま貫き続けることが、いかにキリスト教の未来に暗い陰を落とす結果になるかと、一九五九年一月二十五日、突如としてヨハネス二十三世の大英断によって、第二ヴァチカン公会議が招集されたのです。そして過去の方針をもってしては、カトリック教会が人類の未来に対し、イエス・キリストの教えに基く貢献ができないのだと、二〇〇〇年に及ばんとする歴史的な方針に対し、宗教者として真の主体性を回復した立場から、一気に大転換を決断したのでした。

即ち、それまでのカトリックにおける世界の諸宗教の価値に対する伝統的な認識に修正を加え、世界中のあらゆる宗教とカトリック教会が、対等の関係であることを世界に対し宣言し、その証として、対等な立場を相互に認め合わねば成立しない「対話」を通して、人類の未来における永遠の平和と正しい秩序の為に貢献することを、全世界に対し公式に告げるに至ったのです。全世界で十億人もの信徒を有する、今日の宗教界最大級の宗教的組織ヴァチカンは、このようにして思想的な危機を、「対話」の採択を決意することにより、からくも免れたのでした。今日、世界

の宗教界は、このローマ・ヴァチカンの高潔な精神に基く重大な歴史的決断に対し、心からの畏敬の念を抱いています。

ところで、この「宗教対話」を個別な宗門・教団の立場から捉えた場合、どのような具体的成果が期待できるのでしょうか。判りやすい成果やメリットと言えるものがあり得るか否か。この質疑に対し筆者は、宗門或いは教団として「宗教対話」に正しく取り組む事により、必ず有益な成果がもたらされると確信できるのです。その第一の理由から述べてみましょう。それは、「宗教対話」の取り組みを通して、現代社会のニーズに応えることの可能な宗教的人材が育成できると考えられる点です。即ち、宗門や教団の立場から、今後の中長期に立った教団の未来を展望する場合、常に問題となるのがこの次世代の宗門を背負う「人材育成」の議論であり、通例では、これを以って、最も容易ならざる難題のひとつと位置付けられています。

しかし、「宗教対話」の指導に関するプログラムやガイダンスを検討する過程でわかる事は、「人材育成」の上で必備とされる大方の課題が、必然的に「宗教対話」の実践的現場に於いても決して欠くことの出来ない論題であり、加えて、「宗教対話」の学習者である教師自身にとり、「対話者」としての主体性に関わる問題につき、自己言及の課題が体験的に学習し易いという利点が挙げられます。

この「自己言及」につき簡単に触れてみたいと思います。従来からのデカルト、ニュートン等が規定した古典的近代科学の承認する常識では、我々人間が自分自身に省察を加える場合、「自我」と「自己」を区別して、「自我」の存在だけを認め、それに対する「自己」の存在については、これを学問の対象としては、承認しないという立場が守られて来ました。因みに、この場合の「自我」とは、本人が客観的に把握することの可能な自分自身であり、本人によって明確に意識される対象化された自分自身を指しています。それに対し「自己」とは、この「自我」の更に奥深い心の深層の領域を示す世界とされています。

この「自己言及」の課題は、現代哲学の中の現象学で近年必ず採り上げられるテーマであり、同時に二十一世紀の最先端科学として注目を集める複雑系で扱われる、現代的でユニークなテーマでもあります。即ち人間が、人間の本質に肉迫する上で、この「自己」の世界こそ、二十一世紀の新たな科学にとって重要な手掛かりとなる思考の原型(モデル)を示すものであることが、多くの科学者によって漸く承認されつゝあるのです。この「自己言及」の課題こそ、自然科学と哲学の境界領域の課題として、現代科学の知が宗教的領域に切り込んでいく鋭さが端的に示される事例のひとつなのです。

さて、次に今ひとつ、この「宗教対話」への取り組みが各宗門や各教団にとり、大いに益する第二の理由を述べてみましょう。そもそも、宗教一般の多くは、その成立に伴う事情として、極めて限定された地域や文化や歴史等の過酷な制約下に於いて生成・進化する事実が確認されています。この点は、それが歴史や伝統を有す文明宗教であれば、なおその傾向が顕著なのです。即ち、普遍的な思想性をもつ文明宗教では、その独自な教義や教判の原型（モデル）を竪立する上で、地域の伝統的な文化的特性に対し、強力な創発的意思を以ってこれの吸収に努めながら、一層能動的主体性を確立しつゝその宗教を拡大的に進化させてきた状況を見て取ることが出来ます。

このような宗教の成立事情により、宗教の有力な特性のひとつとして、宗教が個性の特徴に価値を見出し、多様性の尊厳を容認するに至るのです。それでは何故、宗教が多様性の価値を容認するのでしょうか。その理由は明白です。それは、人間が、その本質に含む最も有力な価値こそが、一人ひとりの人間の個性であり、多様性であることの理由によるものに相違ありません。この地上に、夥しい数にのぼる多様な宗教が存在する理由は、その夥しく多様な宗教を必要とする、これまた夥しい数にのぼる個性をもつ人間の側の事情に基くものであろうことはほぼ間違いありません。

しかるに、現代の古今未曾有な近代科学技術の発展により、急激なグローバル化が引き起こされ、今や地球全体が

小さな一地域でしかない異常な事態を迎えています。その事により、異なる宗教と文化と文明の急接近に備え、世界の異宗教間の共存的調和の実現が、直ちに最大テンポの速さで求められているのです。これは即ち、従来のローカルな地球事情の枠組みの中で、多様性の伝統を引き継ぎ、分離思考の原型(モデル)に基く認識論的地平の「知」を提供してきた宗教に対し、時代は突如として、空前の大転換を要求するに至ったのです。そして、今や一つの地球全体の文化を前提として、新たな統合化を基軸とする宗教が、統合の思考の原型(モデル)を通して、存在論的地平の「知」を提供することにより、これまでとは全く異なる新しい時代の動向を創発させる状況をもたらしつゝあるのです。

この認識論的世界観から存在論的世界観への転換こそ、ニュートン、デカルトの古典的近代科学思考から、現代の最先端の複雑系科学思考への転換を示唆していることは、現在の大方の知的リーダーが、よく知るところであります。因みに、十七世紀のニュートン、デカルトが切り開いた、古典的近代思考を前提とする主・客分離思考の「統合」は、個人の個性である多様性を否定し、一致性の統合だけを支持する統合であり、ナチスのファシズムや共産主義の一統独裁の形態がこれに相当するのは周知の通りです。しかし、二十一世紀の複雑系思考を前提として位置付けられる、主・客非分離思考の「統合」は、多様性を全面的に肯定し、大局の全体的一致性の統合をも実現する逆対応の統合であり、その具体的な普遍的根拠としては、大脳科学・細胞免疫学・遺伝子工学・トランス・パーソナル心理学・現代哲学の中では現象学、その他多くの認知科学の領域とする諸学の成果を通して、その基礎研究の確かさを既に雄弁に実証しています。

このような経緯を経て十七世紀には、古典的近代の線形・確定論的・主客分離の思考のパラダイムが、すべての学問を定立させたのですが、二十一世紀にはこれが大転換し、複雑系による非線形・不確定論的・主客統合の思考のパラダイムが、これまでの分離思考の成果を反転させて、従来の学問を抜本的に再構築させる可能性が予想されています。さて、このような由々しき事態と言うべき「知」の大変革が何故、今この時期に惹起されるのでしょう。それ

は、近代文明社会が成熟すると、これまで社会に発生した諸問題の解消に貢献してきたはずの、従来の主・客分離思考を前提とする専門領域の知性を以ってしては、明らかに問題の解決に困難をきたす事実が次第に判明してきた事と決して無関係ではありません。

近代文明の成熟期には、社会で発生する問題の多くが、専門領域の域内に収まる問題ではなく、むしろ専門と専門の二領域を区別する境界線に象徴される境界領域内（インターフェイス）で発生する問題がほとんどを占めるに至ります。この境界領域に発生する問題こそ、近代文明社会に特有な社会病理的な症例による複雑な問題であり、この問題の解決に不可欠な知性が統合の思考(主・客非分離の思考)に他なりません。ところで今、この本篇で問題とする「宗教対話」は、この境界領域（インターフェイス）に発生する課題であり、この「宗教対話」を通して解決を図る限り、およそ宗教がもたらす一切の社会病理的な諸問題が悉く解決に向うことが確定的に予想されるのです。相互に異なる宗教と宗教の境界に於いて行なわれる「宗教対話」を通じて、宗教が関わるすべての問題が根本的に解決するのは、そこに複雑系の「知」を前提とする統合の思考(主・客非分離の思考)が投入されるからに他なりません。

この統合の思考をめぐる中核的課題こそが、複雑系を前提とする「統合」の概念化をめぐる研究であり、筆者が主催メンバーの一人として関わる統合学術国際研究所は、ここに述べる趣旨で設置された日本で最初のささやかな研究機関であります。目下、三つの研究チームに分かれて世界で最先端のユニークな研究が進められています。以上のような次第で、二十一世紀における世界の諸宗教の歴史的な潮流は、「宗教対話」へと向かうことが、予見されています。因みにこの宗教界における世界的動向が多くの人に認知されるのは、おおよそ今世紀も半ばを過ぎる頃であろうことも、現代の多様な分野の知的動向の推移を通して予想されるのです。

(3) 「宗教対話」が宗教の進化に貢献し、人類の指標を創造

「宗教対話」が実施される際に、対話に臨む相互で自覚的主体性をもって共有すべき、「対話」の為の申し合わせが必要であることが確認されています。それは以下の通りであります。

(1) 「対話」に臨む相互は、互いに相手に対し求道の志ある宗教者としての深い敬いの心が必要です。どちらか一方が、何等かの理由で優位な意識や傲慢な意思を以って「対話」に臨んだ場合には、「対話」の成果は容易に期待できない悲惨な結果を迎えます。

(2) 「対話」に臨む相互に於いて、もし共有すべき「目的」があるとすれば、それは相互に「対話」を通して相手から「自己」が学ぶという真摯な求道の姿勢にあることを、最初に確認しあわねばなりません。そこから生じる相互の信頼が「対話」の価値を不動なものにするのです。

(3) 「対話」は、「対話」に臨む相互にとって有意義であることにおいて価値があります。更に言えば、「対話」に臨み、自己にとって有意義である「対話」が進められてこそ、相手にとってもまた、有意義な「対話」が実現するのです。この事実についての確信が、相互で共有される「対話」において、真の価値が必然的に創発されるのです。

(4) 「対話」の実施は、先ず同じ宗教を信仰する者どうしの「対話」が試みられ、充分に自己の宗教に対する見識につき鍛錬が進み、先ず以って自己が信仰する宗教の奥義に触れつつ、次第に他の宗教を信仰する者との「対話」に進むことが望ましい姿です。「対話」の意図は、「対話」に参画する相互の宗教を、「対話」を通して思想的に進化（深化）せしめることにあります。

（5）「対話」が、最初から相手を打ち負かす趣旨でおこなうものであっては正しくありません。ただし、自己の信仰や信条を述べるに際し、卑屈な遠慮や気がねをする態度は好ましくありません。「自己」の信仰につき確信する所があれば、その理由と背景を冷静な態度で、素直に且つ真摯な姿勢を通し、相手に対し心を込めて恭しく述べるべきなのです。

（6）宗教者が、宗教的課題或いは、それに関連する諸問題をめぐって、宗教以外の多分野の専門家と「対話」に及ぶ場合も、「宗教対話」であると認識されるべきであります。宗教者が科学者と境界領域の諸問題につき好ましい「対話」ができれば、予想を越える価値ある成果が約束されます。現代は、そのような時代なのです。

（7）「対話」とは、先に述べた通り、自己が他者と出逢い、他者から自己が学ぶことにその本来の趣旨があるのです。人間は、かくして他者を知ることを通して、新たな自己を自己の中に発見する為の契機を得ることがあります。そこに人間の真の主体性の確立が約束されるのです。宗教が自己の真の主体性を確立する営みであるとすれば、他の宗教を知らずして、自己の宗教の真実に触れることは困難でしょう。

（8）「対話」に臨む相互が、それぞれに多様な宗教を奉じて、互いに人間どうしの主体性の確立と、尊厳性の格護に努めることは、とても大切なことです。そして、一期一会の出逢いに感謝の誠を捧げて「対話」に臨み、相互互換の主体性に立ち、互いの宗教とその信仰のあり方を、自己の信仰の上に活かすべく学びあうのです。このような「対話」が世界中に広がる事により、人類と宗教の両者が、ニヒリズムと独断から開放され、未来の為にあるべく正しい進化を促すことに貢献できるのではないでしょうか。

(4) 日蓮聖人の畢生の誓願は「対話」の普遍化

日蓮聖人の宗教のもっとも顕著な特徴は、久遠本仏との「対話」を一乗妙法の要法を通して実現し、自己の内奥に菩薩誓願の使命を確立し、予言された自己が、歴史との対話を通し、新たな未来を予言し創造し、宗教的主体を実現することにありました。日蓮聖人は、久遠本仏のもっとも正当な直弟子として、文字通り全人類における宗教上の求道者としての指標を高く掲げて、「対話」の生涯を生き抜かれた方なのです。

日蓮聖人にとり、「対話」は常不軽菩薩の先例が示す通り、「我深く汝等を敬う……」但行礼拝の一行でした。瞋り狂った四衆は、常不軽に対し、悪口罵詈し、杖木瓦石を以って迫害したのですが、常不軽は「避け走り、遠く住して猶声高く叫ばれた」のです。これは増上慢の四衆が、その「自己」の本来の尊厳を知らざるに対し、常不軽菩薩による而強毒之の大慈折伏だったのです。

往々にして、「宗教対話」に対する誤解のひとつがここにあります。「対話」が、相互で真摯に向き合う心の用意に配慮する一事を以って、「対話」を摂折の二門の「摂受」と見誤る傾向があるのです。しかし、「対話」はむしろ、その本来の機能からして、折伏的信解を含む深般若の知によって、照らし出される事実に気付かねばなりません。

因みに、折伏の対象として、日蓮聖人の取り上げられた四箇格言は、上行菩薩を自覚された大聖人の立場に於いて、絶対的必要不可欠でした。それは成仏・不成仏に関わる命題が、日蓮大聖人にとって焦眉の急なる課題であった為でした。しかし、あえて言えば、いつの時代であっても四箇格言の会仏・禅・真言・律宗だけが、折伏の対象であるとする解釈に止まれば問題が生じます。折伏の対象は、謗法を行なう当事者に向けられるべきであり、現代では謗法の概念枠に新たな意味が付加されるべきであります。四悉壇を以って時に適うべきであり、四箇格言は四悉壇との

相互補完性を以って、原理的視点からは円理であるが故に、発展的創造的に捉えるべき場合があることにご注目頂きたいと思います。

近代文明を生み出したコンテキストは、主・客分離の思考を原型（モデル）として成立しています。今や近代文明の悪影響は、この地上からすべての宗教を絶滅させるべく、確実に人類の健全な「知」を葬り去ろうとしています。しかし筆者は、寡聞にしてこの点の危機を訴える声を、仏教界で一度も聞いたことがありません。日蓮聖人が、今の世にご在世であれば、この事につき第一に叫ばれたと信じられるのです。

ところで日蓮聖人は、この「宗教対話」の実践をご生涯に亘り、ご自身が不惜身命で進められました。そして同時に、広く僧俗の門下にもあえて正しい「対話」のあり方につき指導されています。即ち、「この大法を弘通せしむるの法には、必ず一代の聖教を安置し、八宗の章疏を習学すべし」（曽谷入道殿許御書）日蓮聖人は、信徒に対して「対話」を勧めるに当たり、修学すべきは法華経の教義のみならず、「対話」の相手が信仰する聖教に至るまで学ぶべし、と指南されていたのでした。

現代ならばキリスト教は無論のこと、ユダヤ教、そしてイスラム教の教義、更には、現代社会に対し、最も支配的な影響を与え続ける近代合理思想と近代啓蒙主義に至るまで、私共は学習の範囲を広げなくてはなりません。その為には、私達日蓮聖人門下は、「対話」を通して真摯に且つ積極的に欧米の諸宗教を学ばなくてはなりません。その同じ「対話」の「場」を通して、欧米の諸宗教者に対しても、我々日蓮聖人門下から本化別頭の仏法へと結縁されるべきでしょう。多様な価値観が、複雑に交錯する現代社会では、布教・伝道の現場で「対話」を欠落させる事などあり得ないし、あってはならないのです。